

西洋から鏡の国へやって来た人類学者：アラン・マクファーレンの
日本研究によせて

佐藤 淳

キャプテン・ガリバーが、ラグナグを去って日本に上陸したのは、1709年の中頃のことであった。彼は、首都、江戸へと赴き、そこで皇帝との謁見を許される。ガリバーは、オランダ人のふりをする一方で、「十字架を踏みつける」という「儀式」（言うまでもなく 踏み絵である）を行うのをなんとか免れる。結局、ガリバーは、長崎へと護送され、同年の6月9日同地に無事到着する。彼は、オランダ人の船乗り数人によって保有されているアムボイナ号に乗って、アムステルダムへと出港する。ガリバーが、ついにイングランドの地に戻ったのは、1710年、4月であった。

残念ながら、当人自身が認めているように、ガリバーの日本滞在は、詳細な見聞録を残すには、あまりに短いものであった。¹

16世紀中頃以降、ガリバーのような架空の人物も含めて、数多くの西洋人が日本を訪れてきた。そして、彼らは、そこに「あべこべの世界」を見つけてきたのである。日本が西洋とは過激なまでに異なるということがファン・ウォルフレンやデールのような少なからずの西洋人達を、戸惑わせたり、煩わせたり、苛立たせたりしてきた。

ブラックレイン（1989年R.スコット監督）という大阪を舞台とした映画の中で、ニューヨークからやって来た刑事のニックは「ここは、まったくわけがわからないぜ」と言う。この作品の中でフィルム・ノワールというファミ・ファタールにあたるジョイスは、日本で長年暮らしてきており、日本語のイエスが文脈や場面に応じて、肯定にも否定にもなることを引き合いに出して、ニックに日本のあいまいさを説明する。

「ここは面白くなんかないよ、ここは違いすぎてるよ！」アメリカ人俳優は日本からアメリカへの電話で、ほとんど怒ったように言う。結果として、ロスト・イン・トランスレーション（2003年S.コッポラ監督）では、日本は、このアメリカ人俳優と若く美しいアメリカ人女性との束の間のめぐり逢いの、奇妙で不可解な背景にされただけであった。

しかしながら、相当数の西洋からの日本への訪問者達が、さかさまの世界としての日本に、単に驚愕するだけでなく、魅了されてきたこともまた事実である。彼らは、たとえばロイス・フロイスやバジル・H・チェンバレン、そしてエズラ・F・フォーゲルらのように、日本についての詳細な見聞録と研究を残してきた。アラン・マクファーレンは、こうした日本との遭遇に魅惑されてきた西洋人の中で最も近年の訪問者の一人である。

マクファーレンの日本に対する驚きは、ある意味で、彼以前の訪問者達

¹ J. Swift, 1994. *Gulliver's Travels*. Penguin books: London. pp. 235-239.

のそれよりも、さらに大きなものであった。というのは、彼の日本の第一印象は「ちょっぴりがっかり」というものであったからである。彼（とその妻）が遭遇した世界の表面は、むしろ彼自身の世界のそれに似ていたのである。しかし、鏡の国に入り込んだアリスは、「まったくありきたりで面白くない」というその第一印象に反して、その世界が外の世界とは「とてつもなく異なっている」ということを知る。² それと同じように、日本に滞在し日本との交流が深まるにつれて、マクファーレンにもその他者性、つまり日本が彼にとって未知なるもので不可解なものであるという感覚が湧き上がってきたのであった。

このマクファーレンの本がその読者に思い起こさせるのは、より深い理解へのきっかけとして他者性を創造的に経験することが、いかに重要かということである。極端に異なるものとの遭遇は、単なる嫌悪や嘲笑、その結果としての拒絶を招く危険性を、常に孕んでいる。マクファーレンの研究は、いわば先述した（フィクショナルな）アメリカ人俳優が絶望して日本を理解する努力を放棄したところから、始まったのである。

換言すれば、日本に対する強い他者性の感覚が、どのように日本は西洋のカテゴリーにおさまるのか？日本の独自性とは何か？そして日本の独自性が彼自身の自省的思考に対してどのような意味をもつのか？といった一連の問いを、彼に喚起したのである。この本は、日本という名の鏡の国での15年にわたる彷徨の後に、彼がこうした問いへの答えとして、最終的に到達したのものなのである。³

生きた花たちの庭園で、アリスは、風に優雅に揺れている一輪のオニユリに話かける。

「あなたたちが話せたらいいのにね！」

「わたしたち、話せるわよ」とオニユリは言った。「でも話す値打ちのある相手がいる時だけね。」⁴

明らかに日本はマクファーレンを話す価値のある存在とみなしたのであり、彼の本は、彼らの対話から生まれたのである。

マクファーレンの基本的目的は、日本を大きな視野から捉えることである。彼は、自らの民族誌的スケッチと過去の西洋からの訪問者達が残した見聞録をよりあわせ、人類学的研究と歴史学的研究を結びつける。彼の

² L. Carrol, 1994. *Through the Looking-Glass*. Penguin books: London. p.21

³ e.g. A. Macfarlane, 1997. *The Savage Wars of Peace: England, Japan and the Malthusian trap*.

Oxford: Blackwell.(邦訳 イギリスと日本—マルサスの罠から近代への飛躍 [船曳建夫監訳. 新曜社.2001年.])

2000. *The Day the World Took Off* (a TV documentary series). C4 Television, UK.

2002. *The Making of the Modern World: Visions from the West and East*. Basingstoke: Palgrave.

マクファーレンの日本についての一連の論文は、彼のウェブサイト (<http://www.alanmacfarlane.cam.FILES/jap.html>.)で読むことができる。

⁴ *ibid.* p.32

アプローチは、長い時間軸をとった比較である。このようにして、彼は日本を日本たらしめてきたものを浮き彫りにしようとする。

しばしば言われるように、おもしろい人類学的著作は、意識的に自省的なものである。これはマクファーレンの本にもあてはまる。彼の日本についての本は、実際、単に日本についてだけではなく、西洋、さらには地球上の他のすべての文明についてのものなのである。言い換えれば、この本の基本的テーマはマクファーレンがその研究生活を通じて探求してきたもの、すなわち近代とその起源に、密接にむすびついているのである。

たしかに、彼の本には社会・文化的進化論の残滓がいくつか見出されることは否定できない。たとえば、彼ははっきりと日本をそう呼ぶことを避けてはいるが、日本は（巨大な）部族社会とほぼ同じものとみなされている。しかし、この本は、ある意味で、学術的な「はなれ技」である。読者は、この本を通してマクファーレンが文化相対主義と（多かれ少なかれ進化論に影響されている）西洋の全般的な枠組みとのバランスをとろうとしていることを、見るであろう。最終的に彼は、日本は西洋の近代化とは異なる近代化の道筋を示していると指摘する。

J. ボディは人類学的経験を、それが知識は他者の中への没入を通じて自己を超越することによって得られるという信念を土台としているという意味で「グノーシス的」と呼んでいる。⁵ I. M. ルイスと同じような論旨で、⁶ 彼女は人類学的経験を、憑依に喩える。人類学者のインフォーマントと調査地の「霊」は、フィールドから戻ってからも長らく人類学者のもとにとどまる。こうした霊の「声」すなわち人類学者の経験は、その記憶につきまとい、なかなか離れず、それはその日常生活にあたらしい形を与える。

このつきまとい、なかなか離れない声は、しばしば甘味と苦味が入り混じったものである。マクファーレンの経験の場合、ユートピアや妖精の国やエデンの園といった彼によって用いられた一連のメタファーは、彼が西洋の伝統に根ざしていることをしめしている。すなわちそこに失(われたとされる)楽園への郷愁が見いだされるのである。

しかしながら、ボディが指摘するように、⁷ 人類学者はこうした憑依的他者を、自らの人類学的な論文やモノグラフを書くことによって、祓う、あるいは少なくともシンボリックに鎮めるのである。マクファーレンの日本についての本は、自らの他者性の経験を、単に日本という異なるリアリティについての知識だけでなく、西洋の自己知識をも提示する文化的テキストへと変換しようとする彼の真摯な試みなのである。その読者は、彼の学術的トレードマークである読み易さと洞察の鋭さの両立を、この本の中にも、見出すであろう。

マクファーレンは、プロスペローのエピローグを引用しながら、彼の

⁵ J. Boddy, 1989. *Wombs and Alien Spirits: Women, Men and the Zār Cult in Northern Sudan*. The University of Wisconsin Press: Wisconsin. pp.356-360

⁶ I. M. Lewis, 1996(2nd ed.). *Religion in Context: Cults and charisma*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.7-8.

⁷ Boddy, loc. cit.

フィールドである日本を去った。しかし、その中にすでに暗示されているように、人類学的経験は、それが時間的にはどれだけ限定されたものであったとしても、継続的に相互作用的なものである。⁸

おそらく映画ブラックレインの中でのジョイスの日本についてのコメントが、シェークスピアのあらしにおけるこの魔法使いの言葉に照らすと、興味深いかもしれない。映画の終わり近く、ニックは、ジョイスにあとどれくらい日本にいるつもりなのかとたずねる。彼女は答える。「わからないわ、でも、愛憎相半ばするっていう関係は、かえって長続きするものよ。」

⁸ *ibid. loc. cit.*